

ブリヤート語 буряад хэлэн (bur'ād xelen), 英 Buryat, Buriat, 露 бурятский язык, 中 布利亚特 (Būliyàtè)

【概 説】 モンゴル諸語の1つ。ソ連邦東シベリアのバイカル湖沿岸、モンゴル人民共和国の北部、中国内蒙古自治区の呼倫貝爾盟西部等に居住するブリヤート族によって話される。多くの方言を含み、話者数の総計は、推定で35万人前後である。狭義では、ソ連邦のブリヤート自治共和国 (Бурятская АССР) 等のブリヤート族によって用いられている口語標準語と、ロシア字に基づくその書き言葉をさす。

ブリヤート族の主な分布地域と人口は、次のとおりである。

まず、ソ連邦のブリヤート族は、ブリヤート自治共和国、チタ州(Читинская о.)のアガ・ブリヤート自治管区(Агинский Бурятский авт. окр.), イルクーツク州(Иркутская о.)のウスチ・オルダ・ブリヤート自治管区(Усть-Ордынский Бурятский авт. окр.)を中心に分布し、人口は、1985年の統計で、38万5千人。このうち、ブリヤート語を母語とするものは90.2パーセントである。

ソ連邦のブリヤート族は、ブリヤート自治共和国東部のホリ(Хори)方言を基礎にした標準語を発達させ、1939年以来、ロシア字に h, e, y の3文字を加えたアルファベットで表記する書き言葉を使用している。

次に、モンゴル人民共和国では、フブスグル(Хөвс-

гөл), Болган(Булган), セレンゲ(Сэлэнгэ), トブ(Төв), ヘンティー(Хэнтий), ドルノド(Дорнод)等のアイマク(аймаг; 州, 県にあたる行政単位)の北部, ソ連邦との国境沿いに, ブリヤート族が居住している。モンゴル国内のブリヤート族の人口は, 1979年の統計で, 2万9,800人。書き言葉としては, モンゴル人民共和国の公用語であるモンゴル語(ハルハ方言に基づき, ロシア字に, ө, үの2文字を加えたアルファベットで表記する)を用いる。

また, 中国内のブリヤート族(ブリヤート系モンゴル族)は, 内蒙古自治区の呼倫貝爾盟の嶺北四旗とよばれる, 興安嶺の北部四旗(新巴爾虎左右兩旗, 陳巴爾虎旗, 鄂温克族自治旗)を中心に分布している。人口は, 推定で約2万人。彼らの書き言葉は, 中国内のモンゴル(蒙古)族の大部分が用いている, 伝統的な縦書きの蒙古文語である。

【文字】モンゴル族が, ウイグル文字を用いてモンゴル語を表記する「蒙古文語」(または, 「書写蒙古語」ともいう)を書き言葉として採用したのは, 13世紀初めのチンギス汗の時代であるが, ブリヤート族が文字をもって自らの言語を記録するようになったのは, それよりはるかに遅く, 18世紀に, バイカル湖の東のブリヤート族が, ハルハ・モンゴルから仏教とともに蒙古文語を受け入れたことに始まる。しかし, 仏教も蒙古文語もバイカル湖の西のブリヤート族には及ばず, 西部ブリヤート族は, 今世紀の20年代まで自らの書き言葉をもたず, 書記にはロシア語を用いていた。

西部ブリヤート族に対しては, 今世紀の初頭に, アグワン・ドルジエフ(Агван Доржиев)が蒙古文語の文字の字形を増やし, 長母音や子音の口蓋化を表わす若干の識別符号を加えた新しいアルファベット(蒙古文語と同様, 縦書き)を作成して, 彼らの口語を表記する書き言葉を普及させることを試みたが, 成功しなかった。これは, アグワン・ドルジエフのサンスクリット名をとって, 「ワギンドラー(vagindra)文字」とよばれる。

また, 同じ時期に, バラディン(Б.Б. Бардин)は, 全ブリヤート族を対象に, ローマ字アルファベットによってブリヤート語を表記する書記法を提唱して普及に努めたが, これも広く行なわれるに至らなかった。

ロシア革命後, 1921年には, ブリヤート・モンゴル自治州がたてられ, 1923年には, ブリヤート・モンゴル自治共和国が建国された(1958年に, ブリヤート自治共和国と改称)。同共和国では, 1920年代の後半にソ連邦の諸民族の間に高揚した, ラテン字(ローマ字)化運動に呼応して, 1930年に, ラテン字アルファベットを採用した。翌1931年には, モンゴル, カルムイク, ブリヤートの代表がモスクワに集まって, 3言語に共

通のラテン字アルファベットを採用することを決め, ブリヤートも, この方式に移行した。

当初, ラテン字を用いて表記する書き言葉の基礎におかれたのは, モンゴル人民共和国のハルハ(Халх)方言であったが, 1931年からは, ハルハ方言と東部ブリヤート方言との中間的方言にあたるセレンゲ(Сэлэнгэ)方言が, 書き言葉の基礎とされた。しかし, 汎モンゴル主義に対する批判と, セレンゲ方言が必ずしも全ブリヤート族にとって理解が容易でないことを理由に, 1936年には, 東部ブリヤート方言の1つであるホリ方言を書き言葉の基礎とする決定がなされ, ブリヤート独自の文章語を発達させる方向へと路線を変更した。

さらに, ソ連邦内のラテン字化運動の転換の中で, ブリヤートでも, 1939年に, ラテン字アルファベットを廃して, ロシア字に基づく新しいブリヤート語アルファベットを採用した。この場合にも, 上述のホリ方言が書き言葉の基礎とされ, これが, ソ連邦のブリヤート族の標準語として育成されて, 今日に至っている。

現代ブリヤート語のアルファベットは, ロシア文字のすべてに, ө, ү, һの3文字を加えた36文字である。表1は, ブリヤート語のアルファベットに, 代表的な音価を付したものである。

〈表1〉 ブリヤート語のアルファベットとその音価

А а	а	Л л	l	Х х	х
Б б	b	М м	m	Һ һ	һ
В в	(v)	Н н	n	Ц ц	(ts)
Г г	g	О о	o	Ч ч	tš
Д д	d	Ө ө	ö	Ш ш	š
Е е	je	П п	p	Щ щ	(štš)
Ё ё	jo	Р р	r	Ъ ъ	硬音符
Ж ж	ž	С с	s	Ы ы	ı
З з	z	Т т	t	Ь ь	軟音符
И и	i	У у	u	Э э	e
Й й	i	Ү ү	ü	Ю ю	ju, jü
К к	(k)	Ф ф	(f)	Я я	ja

注: カッコ内の音は, もっぱら外来語の発音に用いられる。

【言語特徴の概観】ブリヤート語は, モンゴル語系諸言語の中で, ハルハ・モンゴル語やカルムイク語と比較的近い関係にある。しかし, 音韻, 形態, 語彙のそれぞれの分野において, ブリヤート語固有の特徴が少なからず観察され, この言語独自の歴史的発展の跡をたどることができる。こうした言語的特徴からすれば, ブリヤート語と, ハルハ・モンゴル語やカルムイク語との言語的隔たりは, 後二者間の隔たりよりも大きいと推定される。

I) 音声的特徴 ハルハ・モンゴル語やカルムイク語と比較して、特に目立ったブリヤート語の言語的な特徴を概観すると、まず、音声的な特徴としては、次のような点を指摘することができる。

1) ハルハ・モンゴル語やカルムイク語で区別している前寄りの円唇母音 ü と ö が、短母音で区別がなく、それらに対応して ü が現われる。

ハルハ・モンゴル語	ブリヤート語	
öd	üden	「羽毛」
üd	üde	「正午」
ör	ür'e	「借金」
ür	üre	「種子」

ただし、長母音では、ö と ü の区別は保たれている。

ハルハ・モンゴル語	ブリヤート語	
ör	ör	「自分」
ür	ür	「朝焼け」

2) 蒙古文語の č に対して、š [ʃ] (*i の前で) と s (それ以外の位置で) が、また、蒙古文語の j に対して、ž [ʒ] (*i の前で) と z (それ以外の位置で) が、それぞれ対応している。

蒙古文語	ブリヤート語	
	(*i の前で)	(他の位置で)
č	š	s
j	ž	z

上述のブリヤート語の摩擦音 š, s; ž, z に対して、ハルハ・モンゴル語では、それぞれ摩擦音の tš, ts; dž, dz が対応している。

蒙古文語	ブリヤート語	ハルハ・モンゴル語
čida-	šada-「できる」	tšad-
čada-	sada-「満腹する」	tsad-
jil	žel 「年」	džil
jun	zun 「夏」	dzun

3) 蒙古文語の s に対して、母音の前では声門摩擦音の h が、音節末では閉鎖音 d が対応している。ハルハ・モンゴル語では、一様に、s が対応している。

蒙古文語	ブリヤート語	ハルハ・モンゴル語
sara	hara 「月」	sar
času(n)	sahan 「雪」	tsas
ulus	ulad 「人々」	ulüs
bös	büd 「布地」	bös

4) 蒙古文語の gi の連結における子音 g に対して、ブリヤート語では、通例、子音 j が対応している。ハルハ・モンゴル語では、これに g が対応する。

蒙古文語	ブリヤート語	ハルハ・モンゴル語
agi	aja 「よもぎ」	äg [æq]
ergi	er'je 「岸」	erëg
orgil	or'jol 「頂上」	örgöl [œrgööl]

5) 蒙古文語で i をもち、ハルハ・モンゴル語、カルムイク語、内蒙古語などではなんら *i の痕跡のない個所に、ブリヤート語では、口蓋化子音(軟音)が対応している語が少なくない。

蒙古文語	ブリヤート語	ハルハ・モンゴル語
miqa(n)	m'axan 「肉」	max
niya-	n'ä- 「貼る」	nä-
nisu(n)	n'uhan 「鼻汁」	nus
kimusu(n)	x'umhan 「爪」	xumüs
čisu(n)	šuhan 「血」	tsus

これに関連して、子音体系では、一連の口蓋化子音の系列を有する(後述)。

6) 蒙古文語の単音節語の母音 i, および、多音節語で、第1音節の母音 i が、後続する音節の e, i に先行しているとき、ブリヤート語では、これに母音 e が対応している。ハルハ・モンゴル語では、これに i が対応する。

蒙古文語	ブリヤート語	ハルハ・モンゴル語
ki-	xe- 「する」	xī-
jil	žel 「年」	džil
sine	šene 「新しい」	šin
čiki(n)	šexen 「耳」	tšix

7) ハルハ・モンゴル語の第2音節以降の二重母音 ui, üi に対応して、ブリヤート語では、長母音の ī が現われる。

ハルハ・モンゴル語	ブリヤート語	
darui	darī	「すぐに」
xantsui	xamsī	「袖」
ügüi	ügī	「無い」

8) 第2音節以降の短母音は、弱化母音化しているが、それらは、本来の位置に比較的良好に保たれている。ハルハ・モンゴル語では、音節の改編がすすんでいる。

蒙古文語	ブリヤート語	ハルハ・モンゴル語
aburγu	abarga 「巨大な」	abrāg
turšilya	turšalga 「実験」	turšlūg
kömüsge	xümedxe 「眉」	xömsög

II) 形態的特徴 形態面での、ブリヤート語の目立った特徴としては、次のような点を指摘することができる。

1) 名詞語幹末の「不定の n」が、主格形の末尾で、

n [ŋ] として現われる。

「不定の n」は、名詞、代名詞、形容詞のうちの一群の語に限って、格変化等に際して、語幹の末尾に鼻子音をもつ形とそれをもたない形とが交替するもので、モンゴル諸語に広く見られる現象である。n をもつ語幹を基本として、対格、造格等で語幹末の n が消失し、他の斜格形の語幹では n が現われるものを、「不定の n」をもつ語幹とよんでいる。ブリヤート語では、この「不定の n」が、主格形において n として現われる。ハルハ・モンゴル語や内蒙古語では、主格形に「不定の n」は現われない。

ハルハ・モンゴル語	ブリヤート語	
mod	modon	「木が」
am	aman	「口が」
xel	xelen	「舌が、言葉が」

2) 述語に付く人称語尾がある。

jabana-b	「私が行きます」
jabana-š	「君が行きます」
jabana	「彼が(彼女が)行きます」
jabana-bd'i	「私たちが行きます」
jabana-t	「君たちが行きます」
jabana-d	「彼らが行きます」

3) 名詞曲用や動詞活用において、ブリヤート語に特有の語尾が認められる。たとえば、名詞の曲用では、奪格形語尾の -hā⁴「～から」、動詞の活用では、第1人称の意志形語尾の -hū²「～しよう」、また、形動詞の過去完了形語尾の -nxai³「～した…」、などである。

4) 文法的な関係を表わす語彙にも、ブリヤート語に特有の、次のような後置詞や小詞、接続詞が目立つ。

sō「～の中に(場所)」, gü「～か(疑問)」, hā「～なら(条件)」, xa「～だ(確認); ～らしい(推量)」, xada, xadā「～なら(条件)」, gēs「～は(主語提示); ～だね(確認)」, など。

5) 複文の従属節である副詞節の中の主語は、ハルハ・モンゴル語のように対格形にならない。従属節中の主語は、主格形か属格形のいずれかで表わされる。

以下の記述は、ホリ方言に基づくブリヤート文章語(標準語)の概要である。

[音 韻] ブリヤート語では、語の第1音節に、常に強勢(強さアクセント)がおかれる。

これに関連して、第1音節の母音は明瞭に発音され、互いに、はっきりと区別されるが、第2音節以降の母音は、多かれ少なかれ不明瞭な弱化した母音として現われる。これは、短母音に関して、特に顕著に認められ、第2音節以降の短母音は、すべて中舌母音に近い弱化母音である。

batalxa [batālxā]「確認する」

negedexe [negēdēxē]「ひとつになる」

xožomdoxo [xəžōmdōxō]「遅れる」

xüdelmer'ešen [xudēlmērēʃēŋ]「労働者」

第1音節に現われる短母音は、i, e, a, o, u, ü の6種類で、長母音は、短母音のそれぞれに対応する ī, ē, ā, ō, ū, ü に ̄ を加えた7種類である。

それらの調音的な位置関係は、表2のとおりである。

〈表2〉 ブリヤート語の母音

	(前舌) 非円唇	(中舌) 円唇	(後舌) 非円唇	(舌) 円唇
狭	i	ü		
中	e	(ō)		u
広			a	o

したがって、IPA の表記では、円唇母音は、それぞれ、u [o], o [ɔ], ü [u], ō [œ] にあたる。

二重母音は、ai [aē], oi [oē], ui [oī], iü [ui] の4種類がある(*ei は、長母音 ē に融合した)。

第2音節以降の短母音としては、i [i], e [ē], a [ā], o [ɔ] の4つが現われる。いずれも、中舌化した弱化母音である。

子音は、調音点と調音様式によって分類すると、表3のようになる。カッコ内の音は、もっぱらロシア語からの外来語の発音に現われる。p', t', b', d', g', m', n', l', r', x' は、口蓋化音を表わす。

また、š, ž, tš は、IPA で、[ʃ, ʒ, tʃ] である。

鼻子音 n は、語末、および、子音 g, g', x, x' の前では [ŋ]、それ以外の位置では [n] として現われる。

〈表3〉 ブリヤート語の子音

	唇音	齒硬 茎蓋 音	軟 口蓋 音	声 門 音
閉鎖音	無声 p p'	t t' (k)		
	有声 b b'	d d' g g'		
破擦音		(ts) (tš)		
摩擦音	無声 (f)	s š x x' h		
	有声 (v)	z ž		
接近音		j		
側面音		l l'		
ふるえ音		r r'		
鼻音	m m'	n n'		

母音調和があり、第2音節以降に現われる母音は、第1音節の母音の種類によって、表4のような生起の制限がある。

母音調和は、接尾辞にまで及び、造語的・文法的接尾辞のうちには、表4に示したように、次のような母音交替による異形態をもつものが多い。

〈表4〉 ブリヤート語の母音調和

第1音節の母音	第2音節以降に現われる母音			
	(1)	(2)	(3)	(4)
a ā ai	a	ā	ai	ū
u ū ui				
i				i
o ō oi	o	ō	oi	
e ē	e	ē (ō)	ē	ū
ü ū üi				
ō				
i				

注：長母音ōは、第1音節の母音ü, ōの後にのみ現われる。

- (1) a ~ o ~ e
- (2) ā ~ ō ~ ē ~ ö
- (3) ai ~ oi ~ ē
- (4) ū ~ ü

以下、母音調和におけるこれらの母音交替を、

- (1) -a³, (2) -ā⁴, (3) -ai³, (4) -ū²

のように表わす。たとえば、動詞現在時制形の語尾-na³は、-na, -no, -neの異形態をもち、それらのうちのいずれが用いられるかは、次のように、語幹の第1音節の母音によって決まる。

- jaba-「行く」——jaba-na「行きます」
- unša-「読む」——unša-na「読みます」
- bolo-「成る」——bolo-no「成ります」
- jere-「来る」——jere-ne「来ます」
- xüre-「着く」——xüre-ne「着きます」

〔形態〕 造語的、文法的な語形変化は、語幹にさまざまな接尾辞が付くことによって実現される。

語形変化に際しては、一部の人称代名詞や指示代名詞を除いて、語幹の変化は少ない。ブリヤート語は、他のモンゴル系諸言語と同様、安定した語幹に、次々と接尾辞が付着して単語が形成される、典型的な「膠着的」性質の言語である。

語形変化の際の、語幹の交替の主なものは、次のように、いずれも語幹末の音に関するものである。

1) 「不定のn」をもつ語では、格変化に際して、対格、造格、不定格において、語幹末のnは脱落し、共同格では、語幹末にnの現われる形と、nの現われない形の両形が用いられる。

- aman「口」+iji(対格)——amiiji「口を」
- modon「木」+ār⁴(造格)——modōr「木で」
- mor'on「馬」+tai³(共同格)——mor'ontoi ~ mor'otoi「馬と」

以下、「不定のn」は、ama(n), modo(n), mor'o(n)

のように、語幹末にカッコに入れて表わす。

2) 語幹末に鼻子音nをもつ若干の語では、複数語尾-ūd²、および、属格、対格、造格、奪格の格語尾、また、再帰所属語尾-ā⁴、人称所属語尾-in'が接尾する際、語幹末に子音gが現われる。

- an「獣」+ūd²(複数)——angūd「獣(複数)」
- an「獣」+hā⁴(奪格)——anghā「獣から」
- an「獣」+ā⁴(再帰所属)——angā「自分の獣を」
- an「獣」+in'(人称所属)——angin'「彼の獣を」

以下、これを、an(g)「獣」、bulan(g)「隅」、xüben(g)「綿」のように、語幹末にカッコに入れて表わす。

このほか、次の変化は、語形変化に際して一般に認められる現象である。

3) 語幹末の短母音は、長母音で始まる接尾辞が接尾する際に脱落する。

- axa「兄」+in(属格)——axin「兄の」
- xutaga「ナイフ」+ār⁴(造格)——xutagār「ナイフで」
- jaba-「行く」+ād⁴(分離副動詞)——jabād「行って」

4) 長母音、二重母音で終わる語幹に、長母音で始まる接尾辞が接尾する際に、語幹と接尾辞との間に「つなぎの子音g」が挿入される。

- bū「銃」+ār⁴(造格)——bügār「銃で」
- bai-「居る」+ād⁴(分離副動詞)——baigād「居て」

以下、「つなぎの子音g」は、-(g)ār⁴、-(g)ād⁴のように、接尾辞の前にカッコに入れて表わす。

A) 名詞 名詞類の曲用には、1) 数、2) 格、3) 所属、の3種類がある。これらは、それぞれ独自の語尾によって表わされるが、それらが1つの名詞に同時に付くときには、複数語尾、格語尾、所属語尾の順で接尾する。

- ax + nar + hā + šn'i —
- 兄 (複数) (奪格) (2人称所属)
- axnarhāšn'i「君の兄さんたちから」

1) 数の範疇としては、複数語尾がある。複数語尾の付いた複数形は、2個以上の事物に言及する場合に必ず用いられる義務的なものではなく、ばらつきや多様性を強調する場合に用いられる。数詞や数量詞によって限定されている名詞は、通例、複数語尾をとらない。

複数語尾には、a) -ūd², b) -nūd², c) -d, d) -nar³がある。このうち、もっとも生産的な語尾は、-ūd²と-nūd²である。

このほか、-šül², -šüd², -nad³ (< -nar + -d), -s など、の複数語尾も用いられることがある。

2) 格の種類と語尾, および, その代表的な意味は, 次のとおりである. また, 表5, 表6に, 格変化の例を示す.

名称	語尾	主要な意味
主格	-φ(ゼロ)	「～が, ～は」
属格	-(g)ai ³ , -in, -n	「～の」
対格	-iji, -ji	「～を」
(不定格)	-φ(ゼロ)	「～を」
与格	-da ³ , -ta ³	「～に, ～へ」
奪格	-hā ⁴	「～から」
造格	-(g)ār ⁴	「～で」
共同格	-tai ³	「～と」

不定格は, 対格と同様, 動詞の目的語となる格であるが, 目的語が, 代名詞の属格形や指示形容詞などで限定されたり, 特定化されている場合には, 対格形におかれ, 目的語が特定化されていない場合には, 不定格におかれる. 不定格形が主格形と異なるのは, 語幹末に「不定の n」をもつ語だけであり, 「不定の n」をもたない語では, 不定格形と主格形は同形である.

modon 「木が」——modo 「木を」, など.

属格形語尾のうち, -(g)ai³ は子音で終わる語幹に, -in は短母音で終わる語幹に, -n は二重母音および長母音 i で終わる語幹に付く.

対格形の語尾のうち, -ji は二重母音および長母音で終わる語幹に, -iji はそれ以外の語幹に付く.

与格の接尾辞のうち, -da³ は母音および子音 l, m, n に終わる語幹に, -ta³ はそれ以外の語幹に付く.

〈表5〉 短母音, 長母音, 二重母音に終わる語の格変化

語幹	axa 「兄」	dū 「弟妹」	noxoi 「犬」
主格	axa	dū	noxoi
属格	axin	dūgē 注)	noxoin
対格	axiji	dūji	noxoiji
与格	axada	dūde	noxoido
奪格	axahā	dūhē	noxoihō
造格	axār	dūgēr	noxoigōr
共同格	axatai	dūtē 注)	noxoitōi

注: 正書法では, それぞれ, дүүгэй, дүүтэй と書かれる.

3) 所属には, a) 再帰所属と, b) 人称所属の2種類がある.

a) 再帰所属語尾: -ngā⁴, -gā⁴, -ā⁴, -jā⁴, -n

再帰所属語尾は, 斜格(主格以外の格)の名詞に付いて, その名詞で表わされる事物が, 文の主語に所属することを表わす. 多くの場合, 「自分の～」と訳しうる.

-ngā⁴ は, 属格形に付く. ただし, 属格語尾 -in, -n の後では, -gā⁴ となる.

〈表6〉 子音に終わる語の格変化

語幹	ger 「家」	modo(n) 「木」	an(g) 「獣」
主格	ger	modon	an
属格	gerē 注)	modonoi	angai
対格	geriji	modiji	angiji
与格	gerte	modondo	anda
奪格	gerhē	modonhō	anghā
造格	gerēr	modōr	angār
共同格	gertē 注)	modotoi	antai

注: 正書法では, それぞれ, гэрэй, гэртэй と書かれる.

-ā⁴ は, 与格形, 造格形に付く.

-n は, 奪格形に付く.

-jā⁴ は, 共同格形に付くが, 格語尾と所属語尾が融合して, -tajā⁴ (<-tai³+jā⁴) となる(共同格形では, -gā⁴ が付く形も, 交替形として用いられる).

対格形では, 対格語尾は現われず, 不定格と同形の語幹に, 直接, 所属語尾が付く. その際, 子音で終わる語幹には -ā⁴, 短母音で終わる語幹には -jā⁴, 長母音, 二重母音で終わる語幹には -gā⁴ が付く.

属格 axingā 「自分の兄の」

対格 axajā 「自分の兄を」

与格 axadā 「自分の兄に」

奪格 axahān 「自分の兄から」

造格 axārā 「自分の兄で」

共同格 axatajā ~ axataigā 「自分の兄と」

b) 人称所属語尾は, 「私の」「君の」「彼の」など, 人称代名詞の属格形と同様の所有・所属の意味を, 語尾によって表わす. 語尾には, 次の種類がある.

	単数	複数
1人称	-(m)n'i, -m	-(m)nai
2人称	-šn'i	-tnai
3人称	-in', -n', -n'in'	

人称所属語尾は, 名詞類の格変化形(主格を含む)に接尾する. 母音調和による母音の交替はない.

1人称の語尾のうち, カッコ内の m は, 母音および子音 n で終わる語に付く際に現われる. 1人称単数の -m も, 母音および子音 n で終わる語に付き, -mn'i と交替することがある. なお, -mn'i, -m; -mnai が付くとき, 語末の子音 n は脱落する.

axa 「兄が」——axam ~ axamn'i 「私の兄が」

axin 「兄の」——axim ~ aximn'i 「私の兄の」

mor'on 「馬が」——mor'om ~ mor'omn'i

「私の馬が」

3人称の語尾は, 次のように用いられる.

斜格形(主格以外の格)には, 一様に -n' が付く. そ

の際、属格形語尾 -in, -n の子音 n は、脱落する。
malai「家畜の」——malain'「彼の家畜の」
mor'onoi「馬の」——mor'onoin'「彼の馬の」
axin「兄の」——axin'「彼の兄の」

主格形では、母音で終わる語には -n' を、n 以外の子音で終わる語には -in' を、子音 n で終わる語は、その n をとって、-n'in' を付ける。

axa「兄が」——axan'「彼の兄が」
mal「家畜が」——malin'「彼の家畜が」
mor'on「馬が」——mor'on'in'「彼の馬が」

B) 代名詞 代名詞も、名詞と同様、複数、格、所属の語尾をとって曲用変化する。曲用語尾は名詞に付くものと同じであるが、代名詞の変化では、格変化に際して語幹の交替があることと、不定格形がないことが特徴である。

1) 人称代名詞 人称代名詞では、1人称と2人称の単数で、表7のような語幹の交替がある(「その他」は、他の格の語幹)。2人称単数には、親称と尊称の2つの系列がある。また、尊称の ta は、2人称複数形(「君たちは」としても用いられる。

	1人称 単数	2人称単数 <親称>	<尊称>
主格形	b'i「私は」	ši「君は」	ta「あなたは」
属格形	m'in'i	šin'i	tanai
対格形	namai(ji)	šamai(ji)	tan'iji
その他	nam-	šam-	tan-

注：カッコ内の要素は、任意の交替形として現われる。

1人称の複数形には、斜格形の語幹として、man-と b'iden- の2つの系列がある。これらは、元来は、包括形と排除形の違いであったが、現在は交替形として用いられている。

1・2人称複数代名詞の語幹は、次のとおりである。

	主格形	斜格形語幹
1人称複数	{ b'ide(～bed'e) (なし)	b'iden- man-
2人称複数	tānar	tānar-

1人称複数代名詞としては、上記の形と並んで、b'idener, b'idened, mānar, mānad が、また、2人称複数としては、tānad も用いられる。これらは、格変化に際して、語幹の交替がない。

3人称の人称代名詞としては、次に述べる遠称の指示代名詞が代用されるが、3人称複数としては、tede「彼ら」と並んで tedener という形も用いられる。

2) 指示代名詞 指示代名詞には、話し手に近い

ものをさす近称と、話し手から遠いものをさす遠称の2つの系列がある。

指示代名詞の主格形と斜格形語幹は、次のとおりである。ただし、単数の造格形だけは例外で、enēgēr, terēgēr となる。

	主格形	斜格形語幹
近称 単数	ene	enēn-
複数	ede	eden- ～ edēn-
遠称 単数	tere	terēn-
複数	tede	teden- ～ tedēn-

3) 疑問代名詞 疑問代名詞をはじめとする主な疑問詞には、次のようなものがある。

xen「誰」、jū(n)「何」、ali(n)「どれ」、xedi「いくつ」、xer「どれほど」、jamar「どんな」、zezē「いつ」、xā「どこ」、jā-「どうする」、など。

C) 数詞 基本数詞は、次のとおりである。

「1」 nege(n)	「10」 arba(n)
「2」 xojor	「20」 xor'o(n)
「3」 gurba(n)	「30」 guša(n)
「4」 dūrbe(n)	「40」 dūše(n)
「5」 taba(n)	「50」 tab'a(n)
「6」 zurgā(n)	「60」 žara(n)
「7」 dolō(n)	「70」 dala(n)
「8」 naima(n)	「80」 naja(n)
「9」 jūhe(n)	「90」 jere(n)
「百」 zū(n)	「千」 m'anga(n)
「万」 tūme(n)	

語幹末に n をもった形は、格変化に際して一部の格の語幹に現われるほか、合成数詞を作るときと、名詞を修飾するときに用いられる。例外は、nege「1」と m'anga「千」で、これらは語幹末に n をもたずに合成数詞を作り、さらに nege「1つの」は、この形で名詞の修飾語となる。

nege m'anga jūhen zūn najan dolōn
「一 千 九 百 八十 七(頭)の
xon'on
羊」

一方、語幹末に n をもたない形は、数を数えあげるときや、後置詞の dax'an「～倍」、xūreter「～まで」、garan「～以上」、šaxū「～近く」などととも用いられる。

arba dax'an「10倍」、xor'o xūreter「20まで」、guša garan xūn「30人以上」、など。

数詞も、格語尾、所属語尾をとって、名詞と同様の曲用変化する。格変化に際して、対格、造格で語幹末の n が脱落するのも、「不定の n」をもつ名詞の場合と同様である。

D) 動詞 動詞の活用は、その意味と機能により、1) 命令・願望類、2) 叙述類、3) 形動詞類、4) 副動詞類の4種類に分けられる。

命令・願望類と叙述類は、法(mood)の範疇に属するもので、あることがらを述べる話し手の心的態度に関連する。動作、状態が実現することを話し手の意向として述べるのが命令・願望類であり、動作、状態を事実として述べるのが叙述類である。これらは、いずれも文の末尾に位置して、言い切りの形で文を終止するはたらきがある。

これに対して、形動詞類と副動詞類は、文中の他の語句に接続する動詞の形で、名詞的および形容詞的な意味とはたらきをもつのが形動詞類で、副詞的な意味とはたらきをもつのが副動詞類である。

1) 命令・願望類は、種類が多い。これには、1人称の主語に呼応する意志や勧誘、2人称の主語に呼応する命令、勧告、依頼、3人称の主語に呼応する命令、3つの人称いずれの主語にも呼応する願望、猶予などの形が含まれる。

種類	語尾	例: jere-「来る」(語幹)
◀1人称の主語に呼応する▶		
意志	-hū ²	jere-hū「来よう」
勧誘	-ja ²	jere-je「(一緒に)来よう」
◀2人称の主語に呼応する▶		
命令1	-φ(ゼロ)	jere「来い」
勧告	-(g)ārai ⁴	jer-ērē「(後で)来なさい」
依頼	-(g)i	jer-i「来てください」
◀3人称の主語に呼応する▶		
命令2	-g	jere-g「来るがいい」
◀1~3人称の主語に呼応する▶		
願望	-hai ²	jere-hē「来た方がいいなあ」
猶予	-(g)ūža ²	jer-ūže「(後で)来る」

猶予形は、1人称の主語に呼応するとき(人称語尾 -b, -m, -bd'i, -md'i が付く)は、「後で~しよう」という意志を表わし、3人称の主語に呼応するときは、「(後で)~するがいい」という命令、また、「(今)~しはしまいか」という懸念などを表わす。

命令・願望類の動詞活用形には、呼応する主語の人称と数に応じて、1人称と2人称の述語人称語尾(-b, -bd'i; -š, -t)が付く。

jer-ērē-š「君は来なさい」

依頼形の-iは、通例、2人称の人称語尾(-š, -t)の付いた-iš, -itという形で用いられる。

jer-iš「君は来てください」

jer-it「あなた(方)は来てください」

なお、命令形1には、2人称単数の人称語尾は付かず、命令形1と勧告形では、2人称複数の独自の人称語尾-gtīをとる。

jere-gtī「君たちは来い」

jer-ērē-gtī「君たちは来なさい」

命令・願望類の否定(禁止)は、それらの活用形の前に、否定の小詞büをおいて表わす。

bü jere「来るな」

bü xerelde-je「口論はよそう」

bü xeleg「言うがままにしておくな」

2) 叙述類は、直説法にあたる表現である。時制を表わし、言い切りの形で文の述語となる。文末に位置して、文を終止するはたらきがある。

時制には、次の5種類があり、いずれも、述語人称語尾をとる。

種類	語尾	例
現在	-na ²	jere-ne「来る、来つつある」
近過去	-ba ²	jere-be「(少し前に)来た」
単純過去	-(g)ā ⁴	jer-ē「来た」
遠過去	-nxai ²	jere-nxē「(以前に)来た」
未来	-xa ²	jere-xe「来る」

単純過去形-(g)ā⁴、遠過去形-nxai²、未来形-xa²は、元来、形動詞類であり、それらは、形動詞が補語となった構文から発達したものであるが、現在、言い切りの形で文を終止する点で、叙述類との差をつけることは困難である。

遠過去形の-nxai²は、ホリ方言と、それを反映した文章語に特徴的な語尾である。

このほか、確認過去形の-lai²という形もあるが(例: jere-lē「(確かに)来た」)、これは民話などの口碑文学に現われる方言形で、文章語では、化石化したbe-lē「~だった」以外には、ほとんど用いられない。

未来形に人称所属語尾が付いた形も、言い切りの述語として用いられ、さし迫った未来、あるいは、その行為を行なう必要性を表わす。

jaba-xa-m(n'i)「私はすぐ行く(必要がある)」

否定形は、活用形の後に、小詞güi「~ない」をおいて表わす。güiは、正書法では、先行する語と一緒に綴られる。

jere-ne güi「来ていない」、jere-be güi「来なかった」、jer-ē güi「来なかった」、jere-xe güi「来ない」、など。

遠過去形(-nxai²)と確認過去形(-lai²)では、対応する否定形を用いず、近過去や単純過去の否定形がそれに代わって用いられる。

3) 形動詞類は、a)「~する(した)こと」などの意味で、名詞的な意味とはたらきをもち、あるいは、b)「~する(した)~」と、他の名詞類を修飾する形容詞的な意味とはたらきをもつ動詞活用形の総称である。同時に、動詞として他の語句を支配するはたらきを有し、名詞句・名詞節、形容詞句・形容詞節の核となる。

形動詞類は、名詞の意味では、格語尾、(人称、再帰)所属語尾をとって、名詞類と同様の曲用変化をする。

種類	語尾	例
現在完了	-(g)ā ⁴	jer-ē 「(今)来た～」
過去完了	-nxai ³	jere-nxē 「(以前に)来た～」
完了	-han ³	jere-hen 「来た～」
予定	-xa ³	jere-xe 「来る～」
習慣	-dag ³	jere-deg 「(いつも)来る～」
行為者	-gša ³ ~ -(g)āša ⁴	jere-gše ~ jer-ēše 「来る(人)」

完了形 -han³ は、他の2つの完了形と比較して、より広範に用いられる形であるが、曲用に際して、末尾の n は、「不定の n」と同様の扱いを受ける。つまり、対格と造格の格語尾、1人称の人称所属語尾 -mn'i, -m(単); -mnai(複)の前で n は脱落し、主格形に付く3人称の所属語尾は、-n'in' となる。

jere-h-iji 「来たことを」、jere-h-ēr 「来たことで」、jere-he-m(n'i) 「私の来たことが」、jere-he-n'in' 「彼の来たことが」、など。

過去完了形(-nxai³)と完了形(-han³)は、「～すると、～した時」の意味で用いられることがある。

形動詞類の否定は、叙述類の否定と同様、活用形の後に、小詞 güi 「～ない」をおいて表わす。現在完了形には、小詞 düi 「～ない」が付く形もある。

unša-dag güi xün 「読まない(読書しない)人」
jer-ē düi 「(まだ)来ていない～」

4) 副動詞類は、副詞と同様に、他の動詞、形容詞、副詞などを修飾する形である。同時に、語幹は、動詞として他の語句を支配するはたらきを有し、副詞句および副詞節の核となる。あるものは、等位節の述語となって文を中止し、他のものは、従属節の述語となって主文にかかる。また、副動詞類の一部は補助動詞と結合して、動作のさまざまなアスペクトや様態を表わすのに用いられる。

種類	語尾	例
連合	-n	jere-n 「来、…」
並列	-ža ³	jere-že 「来て、…」
分離	-(g)ād ⁴	jer-ēd 「来てから、…」
条件	-bal ³	jere-bel 「来れば、…」
選択	-nxār	jere-nxār 「来るより、…」
限界	-tar ³	jere-ter 「来るまで、…」
継続	-hār ⁴	jere-hār 「来続けて、…」
即刻	-msār ⁴	jere-msār 「来るや否や、…」
随伴	-xalār ⁴	jere-xelār 「来ると、…」
付帯	-ngā ⁴	jere-ngē 「来るついでに、…」

(選択形語尾 -nxār は、母音調和による交替形をもたない)

このほか、副動詞的な機能をもつものとして、次の

ような語尾も用いられる。これらは、元来、形動詞予定形(-xa³)に、かつての位格および程度格語尾が結合してできたものである。

目的 -xajā³ jere-xejē 「来るために、…」

程度 -xisa³ jere-xise 「来るほど、…」

副動詞類のうち、条件形、限界形、継続形、即刻形、随伴形は、所属語尾(再帰、人称)をとることがある。

また、連合形は、否定詞の güi が付いて、-n güi 「～せずに」という否定の意味でも用いられる。

5) 動詞の態(voice)には、使役、受動、共同、相互の4種類があり、動詞語幹に、それぞれ、次の接尾辞を付けて表わす。

a) 使役態: -ül²-, -lga³- (後者は、長母音、二重母音に終わる語幹に付く)

jere- 「来る」——jerül- 「来させる」

unta- 「眠る」——untül- 「眠らせる」

ū- 「飲む」——ūlga- 「飲ませる」

b) 受動態: -gda³-

ala- 「殺す」——alagda- 「殺される」

üze- 「見る」——üzegde- 「見られる、見える」

c) 共同態: -lsa³- 「(誰かと)一緒に～する」

jere- 「来る」——jerelse- 「一緒に来る」

oro- 「入る」——orolso- 「一緒に入る、参加する」

d) 相互態: -lda³- 「互いに～し合う」

sox'o- 「打つ」——sox'oldo- 「打ち合う」

en'e- 「笑う」——en'elde- 「笑い合う」

6) 動詞の相(aspect)を表わす主な接尾辞は、次のとおりである。

a) 完了相: -ša³-, -žarx'a³- (<-ža³ orx'o-)

jaba- 「行く」——jabaša- 「行ってしまう」

oro- 「入る」——orošo- 「入ってしまう」

xara- 「見る」——xaražarx'a- 「見てしまう」

b) 随時相: -sagā⁴-

jaba- 「行く」——jabasagā- 「時々行く」

en'e- 「笑う」——en'ėsegē- 「時々笑う」

動詞の相は、完了や習慣などの形動詞によっても表わされる。

E) 述語人称語尾 ブリヤート語には、文の述語に接尾して、主語の人称と数を表わす述語人称語尾がある。これは、文の述語となっている動詞の活用形に付くほか、名詞、形容詞、数詞などの補語にも接尾する。また、疑問、否定、陳述などの小詞がある場合には、それらの小詞に述語人称語尾が接尾する。

述語人称語尾の種類と形は、次のとおりである。

	単数	複数
1人称	-b, -m(-b'i)	-bd'i, -d'i, -md'i
2人称	-š(-ši)	-t(-ta)
3人称	—	-d

カッコ内に示した形は、カッコの直前にある形との交替形で、カッコの前にある形は、母音で終わる語に付き、カッコ内の形は、子音で終わる語に付く。1人称の他の語尾は、自由に交替する。3人称では、単数の主語に対応する語尾はなく、複数の語尾(-d)も、しばしば省略される。

b'i jühe- tē-b.

私は 9(歳)をもつ

「私は9歳です」

b'i üx'übün beše-b.

私は 子供 でない

「私は子供ではない」

b'i-šje baha busa-xa-m.

私も また 帰ります

xen gež nere-tē-b-ši?

誰 という 名前 をもつか

「君は何という名前ですか?」

münöder kinō-do ošoxo gü-š?

今日 映画 に行く か

「君は今日映画に行きますか?」

jū ed'exe-b-ta?

何を 食べる か

「君たちは何を食べますか?」

x'ilēme ed'exe-bd'i.

パンを 食べます

「私たちはパンを食べます」

F) 後置詞 後置詞は、名詞類の後におかれて、他の語との関係を表わす。主な後置詞には、次のようなものがある。

1) 語幹形(主格形と同形で、「不定のn」が現われる)を支配するもの:

sō「~(の中)に」, urū, rū「~の(下)方へ」, öde「~の(上)方へ」, tēše「~の方へ」, dēre「~の上に」, doro「~の下に」, mete「~のように」, šeng'e「~のように」, tuxai「~について」, xüreter「~まで」, šaxū, šaxam「~近く、ほぼ~」, など。

zagahan uhan sō bai-dag.

魚は 水 の中 に いる。

ostöl dēre samavār bai-na.

テーブル の上 に サモワール が ある。

b'i šono šeng'e noxoi xarā-b.

私は 狼 のような 犬 を 見た。

なお, tuxai は、属格形を支配することもある。

2) 属格形を支配するもの:

tülō「~のために」, tula, tulada「~のために」,

dunda「~の真ん中に」, orondo「~の代わりに」, šenēn「~の大きさの」, など。

dulma ež-in-gē tülō ogorōd-to

ドルマは 母の(←自分の) ために 菜園 で
xüdel-ne.

働きます。

xon'on-oi šenēn šulün

羊 の 大きさの 石

G) 小 詞 次の小詞は、後置詞と同じように、語句の直後におかれて、先行する語句を強調するはたらきをする。

-šje「~も」; le(母音に終わる語では、-lとなる)

「~こそ;本当に」

sül gazar-ta modon-šje, nogō-šje

砂 漠 には 木 も, 草 も

urğa-dag-güi.

生え ない。

tende -l bai-na.

そこには ある(そこにしかない)。

さらに、次のような小詞は、述語の後におかれ、文全体を修飾する。

1) 疑問: be(母音で終わる語には、-bが付く), gü または gū.

be(-b)は疑問詞を含む疑問文に、gü(gū)は疑問詞を含まない、いわゆるYES-NO疑問文に用いられる。

ene xen-ē nom be?

これは 誰 の 本 ですか?

xen jer-ē-b?

誰が 来ましたか?

beje-š hain gü?

(お)身体は 元気 ですか?

2) 確認・強調: jum, mün, šū, bšū, dā, xa. nugahan xadā uhan-ai šubün jum.

鴨 は 水 鳥 だ。

moskva bolbol eseser-ei nislel mün.

モスクワ は ソ連邦 の 首都 である。

gazā ugā xüiten šū.

外は とても 寒い よ。

3) 推量: bī, beze, xa, xajā.

ā, t'ime jum bī.

ああ, そういう こと だったんだ。

ta jaba-xa-güi beze-t.

あなたは 行かない でしょうね。

sahan oro-xo-n' xa.

雪が 降り そうだ。

ene-šn'i ünen xajā.

これは 本当 だろう。

[統 辞] ブリヤート語の語順は、従属的な修飾語句が、それを受ける被修飾語句の前におかれるのが

大原則である。冠詞、前置詞、関係詞はなく、後置詞を用いる。名詞や形容詞に、文法的な性の範疇はない。形容詞は、語幹形のままで名詞類を修飾し、補語となる。形容詞や副詞には、比較級や最上級の語形変化はなく、比較の表現は、比較される対象を奪格におくことによって表わされる。

sahan-hā sagān, xō-hō xara, temēn-hē
 雪より白く、煤より黒く、ラクダより
 ünder, jamān-hā nabtār. (šāzgai)
 高く、山羊より低い。(謎々、答え：かささぎ)

文は、述語を中心に構成される。述語は、文に不可欠の要素であるが、主語、目的語などは、適宜、省略されうる。

語順としては、通例、述語が文末に位置する。主語、目的語など、述語にかかる文成分の相互の順序は、比較的自由であるが、主語-目的語-述語動詞(SOV)の語順が、もっとも一般的である。その結果、ブリヤート語の語順は、日本語の語順にきわめて近い。

b'i üsegelder magazīn-hā hon'on nom
 私は昨日 店で(奪格) 面白い本を
 ab-ā-b.

買った。

b'i tere nom-iji dū-d-ē unša-ža
 私はその本を 弟に(←自分の)読んで
 üge-be-b.

やった。

述語動詞は、補語を必要とするものと、それを必要としないものに大別される。補語を必要とする動詞の代表的なもの、繫辞動詞(copula)としての、bai-「～である」、および、bolo-「～になる」である。繫辞動詞の現在形 baina は、省略されることが多い。

teden-ē mor'o-n'in' hain bai-ba.
 あそこの家の馬は すばらしかった。
 bata huragša bolo-bo.
 バタは小学生になった。
 ene m'in'i nom.
 これは私の本です。

なお、繫辞の否定は、beše「～でない」によって、存在の否定は、ügi「～が無い」によって表わされる。

tere-n' sai beše.
 それはお茶ではない。
 nam-da sārhan ügi.
 私には紙が無い。

関係詞はなく、従属文は、形動詞や副動詞によってまとめられ、主文に連結する。形動詞や副動詞は、そのままの形で主文中の語句を修飾したり、格語尾、後置詞、接続詞を従えて、主文中の語句を修飾したりする。

sah-ār xuša-gda-nxai ūla xaragda-na.
 雪に覆われた山が見える。
 tarāktar-ai xažūda gurban xün-ē
 トラクターの傍らに 3人の人が
 bai-x-iji dandar xara-ba.
 居るのを ダンダルは見た。
 mönū gara-ža šada-xa-güi xadā, üglō
 今日 出かけられないなら、明日
 gara-xa-bd'i.
 出かける(私たちは)。

従属文中の主語は、主格または属格形をとる。ハルハ・モンゴル語などのように、対格形をとることはない。

ülen xōre-bel borō bolo-xo, üge
 雲が湧き立てば 雨になる、言葉が
 xōre-bel xerül bolo-xo.

湧き立てば 喧嘩になる。(諺)

m'in'i jere-xe-de, tedener üšō jab-ā-düi
 私が来たとき、彼らはまだ出かけてな
 bai-gā.
 かった。

【語彙】ブリヤート語の語彙の基本的な部分は、ハルハ・モンゴル語やカルムイク語など、他のモンゴル諸語と共通の「共通モンゴル語」的な語彙によって構成されている。それと同時に、ブリヤート語の語彙の特色としては、ロシア語からの借用語が多いこと、基本的な語彙のうちにも、ブリヤート語に固有の語彙が散見されることを指摘することができる。

ブリヤート語に固有の語彙としては、次のようなものがある。

zo(n)「人々」、üx'übū(n)「子供」、hamga(n)
 「妻」、basaga(n)「娘」、abāxai「クモ」、müše
 「星」、daida「土地」、xargi「道」、ugā「非常に」、
 xū「すべて」、など。

ハルハ・モンゴル語と、音韻対応上、一部において合致しない語彙を、次に掲げる。

ブリヤート語	ハルハ・モンゴル語
xurga 「指」	xurū
ürge 「顎」	erū
degel 「上衣(デール)」	dēl
uta 「長い」	urt
mül'he 「氷」	mös
heji 「フェルト」	esgi
sārhan 「紙」	tsās
n'ür 「顔」	nūr
nīde- 「飛ぶ」	nis-
xe- 「する；作る」	xī-

ロシア語からの借用語の中には、受容以来、長い年

月を経て、次のように、ブリヤート語として独自の発音や表記法が確立されているものがある。

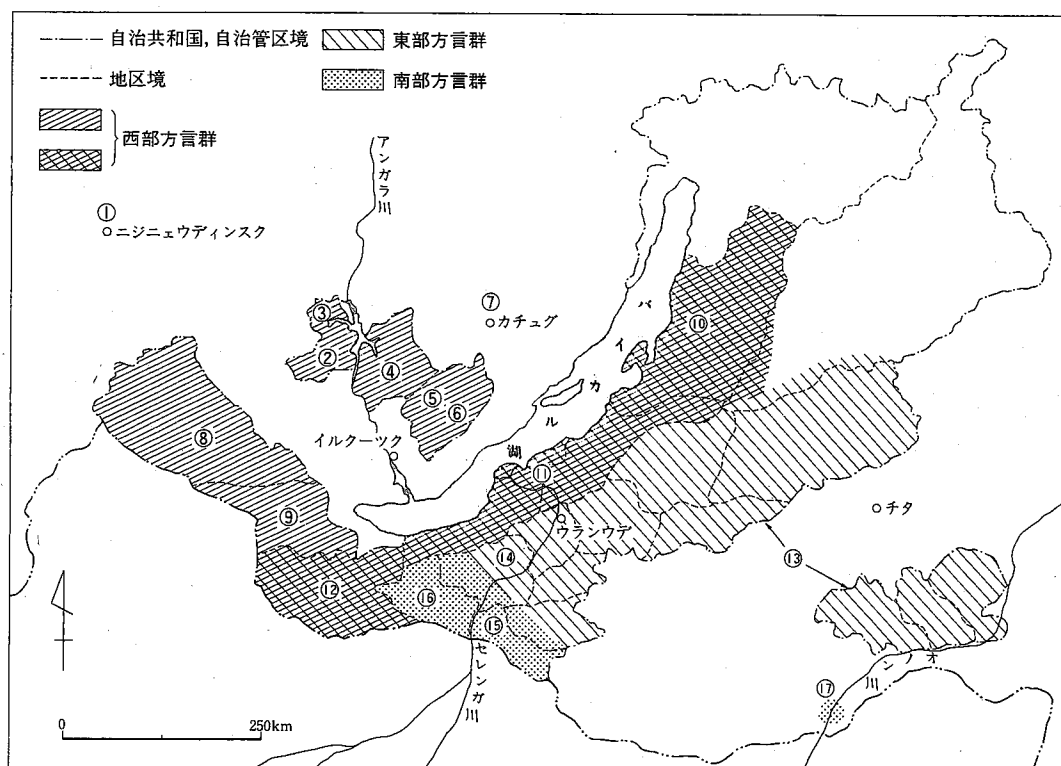
xartābxa「じゃがいも」< картофель,
 ügerse「きゅうり」< огурец,
 morxōb「にんじん」< морковь,
 ješmēn「大麦」< ячмень,
 šen'ise「小麦」< пшеница,
 xilēme(n)「パン」< хлеб,
 p'ēšen「ペチカ」< печь,
 ostōl「テーブル」< стол,
 xerēhe(n)「十字架」< крест,
 sabx'a「長靴」< сапоги,
 pulād「ネッカチーフ」< платок, など。

【方言】ブリヤート語には、多様な方言がある。個々の方言の立て方やそれらの分類のしかたは、研究者によって一様ではないが、ソ連邦内のブリヤート諸方言は、次のように、1) 西部方言群、2) 東部方言群、および、3) 南部方言群、の3つに大別することができる(〈図〉を参照。方言の分類は、ブダーエフ Ц. Б. Будаев, 1978 による。なお ①, ②, … の分類番号は、図に対応する)。

1) 西部方言群(западнобурятское наречие)

- a) ニジニェウディンスク方言(①)
 (нижнеудинский говор)
 b) アラル(②)・ウング(③)方言
 (аларо-унгинский говор)
 c) ボハン方言(④)
 (боханский говор)
 d) エヒリト(⑤)・ブラガト(⑥)方言
 (эхирит-булагатский говор)
 e) カチュグ方言(⑦)
 (качугский говор)
 f) トウンカ(⑧)・オカ(⑨)方言
 (тункино-окинский говор)
 g) バルグジン方言(⑩)
 (баргузинский говор)
 h) バイカル・クダラ方言(⑪)
 (байкало-кударинский говор)
 i) ザカメン方言(⑫)
 (закаменский говор)
 2) 東部方言群(восточнобурятское наречие)
 a) ホリ方言(⑬)
 (хоринский говор)
 b) 北セレンゲ方言(⑭)

〈図〉ブリヤート語の方言分布



注：①, ②, … の数字は本文に対応している。

(североселенгинский говор)

3) 南部方言群(южнобурятское наречие)

a) ツォンゴール方言(㊶)

(цонгольский говор)

b) サルトゥール方言(㊷)

(сартульский говор)

c) ハムニガン方言(㊸)

(хамниганский говор)

それぞれの方言は、音韻と語彙の面で独自の特徴を有しており、文法、形態の面での差異は少ない。各方言群の分布と主な特徴は、次のとおりである。

1) 西部方言群は、ソ連邦、バイカル湖の西側を中心に、湖の東・南岸沿いにも分布する。

西部方言群のうち、ニジニェウディンスク方言(㊹)は、イルクーツク州ニジニェウディンスクの南方に住む500人余によって話される小方言で、ブリヤート方言の最西端をなす。位置的に、他の方言から孤立しており、また、蒙古文語のkに対応して子音kが現われる(他の大部分の方言ではx)など、独自の特徴をもつことから、西部方言群から独立した方言とされることもある。

また、バイカル湖の東・南岸沿いに分布する方言(㊺㊻)は、言語的には、西部方言群と東部方言群の両方の特徴を合わせもち、両者の中間的な方言として位置づけられる。位置的には、バイカル湖の東側にあることから、これを東部方言群にまとめる見方もある。

西部方言群の目立った特徴は、次のとおりである。

a) 蒙古文語のiに先行するjに対して、子音jが対応する。これに対して、東部方言群では、ž(一部はz)が対応する。他方、南部方言群では、これに、dž(一部はdz)が対応する。

蒙古文語	西部方言	東部方言	南部方言
jil 「年」	jil	žel	džil
jibar 「寒気」	jabar	žabar	džabar
jiluyа 「手綱」	jolō	žolō	džolō
jisa- 「直す」	jaha-	zaha-	dzas-

この特徴は、エヒリト・ブラガト方言に顕著に見られる。

b) 西部方言群では、短母音で前寄りの円唇母音 ü と ö を区別する。東部方言群は、ü のみで ö をもたない。

西部方言	東部方言
xörö- 「冷える」	xüre-
xüre- 「達する」	xüre-

c) 蒙古文語のiに先行するkに対して、西部方言群では、t'(ニジニェウディンスク、アラル・ウング)、

s'(ボハン)、š(エヒリト・ブラガト)などの子音が対応する。

蒙古文語	東部・南部方言	西部方言
araki 「酒」	arx'a	art'i, ars'i, arši
takiya 「鶏」	tax'a	tat'a, tas'a, taša

西部方言には、文章語(標準語)では用いられない語彙が多い。これは、バイカル湖の東部とは違って、今世紀の前半に至るまで文字をもたず、仏教の伝播も及ばずに、独自の生活を送ってきた状況と関係している。

西部方言に独自の語彙には、次のようなものがある。

söl 「家; 暖炉」、tura 「建物; 町」、šagābar'i 「窓」、zudan 「森」、nažar 「夏」、xürence 「馬乳酒」、ib'i 「母; お婆さん」、ühē 「天井」、ül'bül 「蒂」、sāža 「おさげ髪」、malgār 「明日」、など。

また、アラル方言で記録された、月の名称も、独自なものである(H. H. Поппе, *Аларский говор*, Часть I, Издание АН СССР и Государственного Института Культуры Бурят-монгольской АССР, Ленинград, 1930 による)。

buga 「1月」、xusa 「2月」、ulān zudan 「3月」、jexe burgan 「4月」、baga burgan 「5月」、gan'a 「6月」、xožo 「7月」、ögölžen 「8月」、xüg 「9月」、ulara 「10月」、ür'e 「11月」、guran 「12月」

2) 東部方言群は、ソ連邦の、ブリヤート自治共和国の東域とチタ州のアガ・ブリヤート自治管区に分布する。現代ブリヤート文章語(標準語)の基礎におかれているのは、東部方言群のホリ方言(㊼)である。東部方言の特徴は、本項で記述したブリヤート文章語の特徴とほぼ等しい。

3) 南部方言群は、セレンガ(Селенга)川下流域一帯とオノン(Онон)川流域に分布する。南部方言群のツォンゴール方言(㊽)とサルトゥール方言(㊾)を合わせて、「セレンゲ方言」とよぶことがある。これらの方言の話し手は、17世紀に、モンゴルからセレンガ川沿岸地域に移住してきた者の子孫で、言語的には、ブリヤート語とハルハ・モンゴル語との移行的な方言として位置づけられる。1931年から1936年まで、セレンゲ方言は、ラテン字(ローマ字)アルファベットで表記される文章語の基礎方言となっていた。

ハムニガンは、モンゴル語およびブリヤート語で、ツングース族またはエヴェンキ族に対する呼称であるが、ここでは、言語的にブリヤートに同化しているものをさす。主な分布地域は、チタ州のオノン川流域の一部である。

これら、南部方言群の主要な言語的な特徴としては、次のようなものがある。

a) ブリヤート標準語の子音, s, z, š(<*č), ž, h に対して, それぞれ, ts, dz, tš, dž, s が対応する。

東部方言	南部方言
zuzān	dzuzdān 「厚い」
sahan	tsasa 「雪」
ašā	atšā 「荷駄」

b) 子音の口蓋化が, 東部方言と比較して少ない。

東部方言	南部方言
m'axan	maxa 「肉」
x'umhan	xumas 「爪」

c) 名詞の主格形に, いわゆる「不定の n」が現われない。

d) ハムニガン方言では, 蒙古文語の k に対応して, 閉鎖音の k が現われる。

ソ連邦以外のブリヤート方言としては, 中国内蒙古自治区呼倫貝爾盟のバルガ・ブリヤート方言と, モンゴル人民共和国北部のブリヤート方言がある。いずれも, ブリヤート語と, ハルハ・モンゴル語ないしは内蒙古語との移行的な方言として位置づけられる。バルガ・ブリヤート(巴爾虎布利亞特)方言については, 「内蒙古語」の項を, また, モンゴル人民共和国のブリヤート方言については, 「モンゴル語」の項を, それぞれ参照されたい。

[辞書]

Цыдендамбаев, Ц. Б. (1954), *Русско-бурят-монгольский словарь* (Государственное издательство иностранных и национальных словарей, Москва)——ロシア語・ブリヤート語辞典で, 約4万語を収録する。

Черемисов, К. М. (1973), *Бурятско-русский словарь* (Советская энциклопедия, Москва)——ブリヤート語・ロシア語辞典で, 約4万4千語を収録する。

[参考文献]

Руднев, А. Д. (1913-14), *Хори-бурятский говор*, Выпуск 1-3 (С.-Петербург)

Поппе, Н. Н. (1933), *Бурят-монгольское языкознание* (Издание АН СССР и Института Культуры Бурят-монгольской АССР, Ленинград)

——— (1938), *Грамматика бурят-монгольского языка* (АН СССР, Ленинград)

Санжеев, Г. Д. (1941), *Грамматика бурят-монгольского языка* (АН СССР, Москва/Ленинград)

Бураев, И. Д. (1959), *Звуковой состав бурятского языка* (Улан-Удэ)

Porre, N. N. (1960), *Buriat Grammar* (Indiana University Publication, Uralic and Altaic Series

2, Mouton, The Hague)

Bosson, J. E. (1962), *Buriat Reader* (Indiana University Publication, Uralic and Altaic Series 8, Mouton, The Hague)

Грамматика бурятского языка. Фонетика и морфология (Издательство восточной литературы, Москва, 1962)

Бертагаев, Т. А. и Ц. Б. Цыдендамбаев (1962), *Грамматика бурятского языка. Синтаксис* (Издательство восточной литературы, Москва)

Porre, N. (1964), "Die burjätische Sprache", *Handbuch der Orientalistik*, I. Abt., V. Band, II. Abschnitt: *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden/Köln)

Бертагаев, Т. А., Имехенов, М. Н. и Д. Д. Дугаржабон (1967), *Буряад хэлэнэй грамматика. Хоёрдохи хуби. Синтаксис* (Буряадай номой хэблэл, Улаан-Удэ)

Имехенов, М. Н. и Ц.-ж. Ц. Цыдыпов (1968), *Буряад хэлэнэй грамматика. Нэгэдэхэ хуби. Фонетикэ, морфологи* (Буряадай номой хэблэл, Улаан-Удэ)

Бертагаев, Т. А. (1968), "Бурятский язык", *Языки народов СССР*, т. 5: *Монгольские, тунгусо-маньчжурские и палеоазиатские языки* (Наука, Ленинград)

Будаев, Ц. Б. (1978), *Лексика бурятских диалектов в сравнительно-историческом освещении* (Наука, Новосибирск)

[参照] 内蒙古語, モンゴル語, モンゴル諸語 (栗林 均)